

浪華名勝帖

黒木樹

翻刻者まえがき

嘉永二年（一八四九）に刊行された香川琴橋の『浪華名勝帖』は、大阪市中の名勝地を網羅し、名所・神社仏閣等の名勝箇所の特徴を著わしている。本稿は本学商業史博物館が所蔵する『浪華名勝帖』を翻刻して、名勝地を簡略に説明紹介したものである。

そもそも江戸時代に編述された、大阪の名所図会類の中で、その代表的なものとしては、秋里籬島が寛政八〜十年（一七九六〜九八）に著わした『撰津名所図会』がある。一方『浪華の賑ひ』・『淀川兩岸一覽』など多数の著作で有名な暁鐘成は、籬島の『撰津名所図会』以上の作品に仕上げ、また鐘成にとっても最後の大作として執筆されたといわれる『撰津名所図会大成』（安政二年以降の作といわれる）がある。

香川琴橋（儒学者）本名北川徹（一七九四〜一八四九）は、鐘成の『撰津名所図会大成』に漢詩三篇を収めている。推察するに、鐘成との接触において『撰津名所図会』に触れた琴橋が、大阪の名勝地を羅列した『浪華名勝帖』として纏めようとしたと思われる。がしかし、琴橋は病に倒れ、その完結はそれを引き継いだ香川昶によって発刊されるに至った。

本稿の名勝地の脚注は『撰津名所図会』『撰津名所図会大成』『浪華の賑ひ』等に依拠し復刻者が作成したものである。図版は主として本学商業史博物館所蔵の『撰津名所図会』による。また翻刻は次の要領で行った。

- 一、漢字は原則として新字体とした。
- 一、変体・異体・略字などは平仮名に改めた。
- 一、本文は原文の体裁を尊重した。
- 一、() 内の振り仮名は新たに加えた。
- 一、本文中の数字は名勝地の注釈を表す。
- 一、校訂者の加えた傍注は() を施した。明らかな誤字は() に正字を記載した。
- 一、印判は罫・花押は(花押)とした。

参考文献

- 秋里籬島著『撰津名所図会』住吉郡、東生郡、東生郡・西成郡、大阪部上・下、寛政八年
 ～一〇年。
- 暁鐘成著「撰津名所図会大成」巻一～巻六、船越政一郎編校訂『浪速叢書』第七巻、浪速
 叢書刊行会、昭和二年。
- 暁鐘成著「撰津名所図会大成」巻七～巻十三、船越政一郎編校訂『浪速叢書』第八巻、浪
 速叢書刊行会、昭和三年。
- 暁鐘成著『浪華の賑ひ』全、初篇・二篇・三篇、文久三年。
- 伴源平編『大阪名所獨案内』上・下、明治一五年銅版復刻版。

表
紙

浪華名勝帖

嘉永己酉歲新鑄

難波名勝帖

鳥文堂藏

印



住吉神社図屏風（大阪市立博物館蔵）

琴橋かあらはしたる

浪華名勝帖を

見て

めもあやに

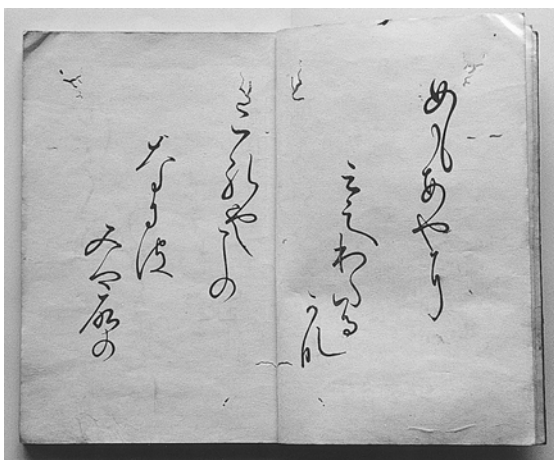
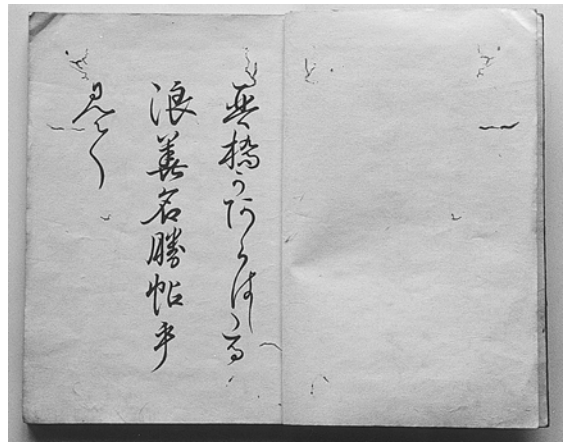
みえわたる

かな

これやこの

なには

みやこの



にしき

なるらむ

(花押)

千種正三位有功卿

難波名勝帖

浪華津にさくや此はな

冬籠り今は春へと咲や

此花とよみて奉りし



高津宮

仁徳帝の御宮居いと

尊く高き屋にのほりて

みれは煙たつ民の竈

も賑にて神壇かゝやく

生玉のきねか鼓や鈴の

おと弁才天女金毘羅也

北にむかへる八幡宮その

流鏑馬は端午なり隆

(1) 高津神社(西高津)。祭神||仁徳天皇(大鷦鷯命)。天正年間大坂築城のとき現在地に移される。社地は高台にあり、眼下は市街の眺め、遙かに望めば河口の帰帆、住吉の里、すみよしの浦までも一望され、風景第一の勝地。遠眼鐘を置き、参詣の人を悦ばせ、茶店の湯豆腐は世に名高く、石段の下の植木屋には年中花の絶えず、常に賑しく参詣の人絶える間なし。
(2) 仁徳天皇の御歌。人家のかまどからたつ煙を見て負しさを知られ諸税を免された話は有名。

(3) 祭神||生魂命、国魂命。四字を合せ生国魂、神という。本尊||薬師如来にして聖徳太子の作という。難波大社・難波大神・生玉大明神・生玉社などと称される。大坂築城に際して現在地に移す。社殿は「生国魂造り」という特殊な建造物で、天正年間の豪壮な桃山文化の建築様式を伝える。道頓堀より天王寺までの中程にあり、参詣者の往来甚だ多い。生玉本社の後方の舞台から西の方を遙かに見わたせば、市中の家々は雲の波の如く、河口の帆は箭の繁るに似ている。洋々としたおお海原に千船百船の出入る白帆の光景は、他に類のない眺望なり。社頭に桜の木多く、夏は門前の池に連の花紅白を交して咲き乱れ、荷葉の匂い芳しく四辺に漂う。

(4) 生玉神社の撰社。祭神||誉田別尊(応仁天皇)・神日本盤余彦尊(神武天皇)・氣長足媛尊(神功皇后)。天正年間の頃より大坂城の諸士此地において射術の訓練をなすにより弓矢神を勧請したといひ、北向いに鎮座しているのは、城の守護のためという。慶長年中に始まったという流鏑馬の遺風を受け継いだ走馬神事あり。境内に蓮池があり、花の盛りは芳香薫り、紅白交して麗わし。

(5) 旭耀山隆専寺(生玉町)。糸桜の大樹多く、彼岸の頃が盛りとなれば、天王寺参詣の人や道の便りに大勢集まり帰るも忘れて花に酔う。



隆専寺 糸桜

専寺の糸桜いと永き

日になかきやり西照庵⁽⁶⁾

月江寺色をはへたる藤⁽⁷⁾

のたな鳳林寺の什宝は⁽⁸⁾

干満の珠の肥かりある

智慧を授る虚空蔵夕⁽⁹⁾

陽の山と敷島のみちに

実紀家隆つか勝鬘院⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

(6) 生玉寺町。下寺町を臨む景勝地にあり、浪花に名高き貸食屋。「座敷より向ふを眺むば、浪花の市町より西海まで見えわたりて絶景なり。されば、夕陽殊に美観なれば西照の名を蒙らすなるべし。庭中林泉、席上の普請、風流にしていはゆる京師の円山に彷彿たり。」(『浪華の賑ひ』より)。庭には桜、楓、萩など多く、その上菊を造りて晩秋上旬より大菊やさまざまの細工菊を飾り賓客をもてなすをもつて殊更に繁昌す。

(7) 天王寺町。光明山林照院と号する浄土宗の尼寺。天王寺古城跡。本尊は阿弥陀仏で恵心僧都の作という。寺内に桜花があり弥生の盛りには美艶なり。また藤の棚もある。茶店には土器投げの興あり。初秋の頃には虫の声多く聞えるゆえに虫谷ともいう。

(8) 天王寺町。伝え云う、鳳凰舞い下りしを以つて鳳林寺と号する。禅宗曹洞宗最乗山。本尊は釈迦牟尼佛。寺宝は聖徳太子作の聖観音像。什宝は宝珠二顆あり。干満と称す円形五分位、黄金の宝塔に蔵む。往昔將軍家(家康)上覧によつて葵の御紋の囊を拝領する。

(9) 虚空蔵菩薩を安置する。参詣の人間断なく、とくに三月十三日は十三才の童子が群参して智福を祈る。これを十三参りという。京師嵯峨の十三参に同じ。

(10) 天王寺夕陽丘町。勝鬘院のうしろ田圃の中にあり。地名を夕陽山という。塚上に大樹の古松あり。藤原家隆(本名は雅隆)は鎌倉時代の歌人。新古今集の撰者。晩年この地に庵(夕陽庵)を持つ。夕陽山(丘)の地名は家隆難波七首のうち

契りあれば 難波の里にやどり来て
浪の入り日を拜みつる哉

従二位家隆

に由来したといわれている。

(11) 愛染堂ともいう。四天王境内。本尊は愛染明王を安置する。聖徳太子この道場において勝鬘経講演された聖地から名とする。聖徳太子が四天王寺を建立された折、敬田・施薬・悲田・療病の四院を造営され、勝鬘院は施薬院の後身で、俗に愛染堂と呼ばれる。愛染明王と釈迦の生母勝鬘夫人像を祀る。境内の多宝塔は文祿三年(一五九四)豊臣秀吉の建立と伝える。本堂は元和四年(一六一八)徳川秀忠再建。例年六月朔日本尊開扉あり、愛染祭という。浪花夏祭の最初にして、遠近より老若群をなして参詣する。

毘沙門天棟たちならふ

愛染堂下たに道場遊⁽¹²⁾

行てらひ浮瀬の貝觶⁽¹³⁾

幾瀬や鳴戸瀧の音梅

かえかをる春風に吾背

子すゝむる君か為酌とも

つきぬ盃は七人猩々舞⁽¹⁾

をさむ軒端にたかき

(12) 下寺町南の端にあり。時宗佛智山円成院極楽寺という。本尊は瑠璃光如来。時宗の祖一遍上人が当地巡行の時はこの寺に寓した。遊行五十一世賦存上人薬師堂を再営して遊行一派の道場とする。この地は浪花より天王寺へ参詣の道筋にあり。ゆえに往来常に多く、ことに春秋の彼岸には群集することおびたしい。

(13) 遊宴の貸食家。浮瀬四郎右衛門この貝觶を所蔵し家号とする。此の浮瀬と銘する貝觶は鮑貝の十一穴を塞いで器とする。是に酒を盛れば七合半に及ぶという。満酌して飲みほす者を誉とし、暢醜醜にその名を著すを風俗とし、またこの觶をつゝむ服巾は唐織にて往昔長曾我部元親という勇将の陣羽織の布という。

我恋は千寿の底の鮑貝
身を捨ててこそ浮瀬もあれ

遊宴の楼は新清水の坂の下にあり、風流の席なり。遙かに西南を見わたせば、海原行き交う白船の白帆、淡路島の山に落ちかゝる三日月、雪の景色は言うまでもなく、庭中には花、紅葉の木々、春秋の草花を植えて年中眺め飽きることなき遊観の勝地なり。種々の珍しい觶について

幾瀬 鴛貝 量一合半 鳴戸 夜光貝 量五合
春風 紅毛の貝盃 量五合 君が為 鮑貝 量二合半
梅枝 鮑貝 量七合八勺 七人猩々は朱塗りに七人猩々の詩絵があり、大器にして六升五合盛れる。ほか
に、瀧の音 量一合 松風 量八合 妹背 量七合 逢瀬 量三合 などがある。



浮瀬の貝觶



浮瀬什物 七人猩々大觶